

目次

序にかえて

総論 石田三成論

谷 徹也 6

第1部 石田三成の人物像

I 石田三成の生涯―その出自と業績―

森岡榮一 86
太田浩司

II 戦国を疾走した秀吉奉行

太田浩司 105

III 石田三成書状―その趣好―

加藤秀幸 128

第2部 豊臣政権における石田三成

I 豊臣期「取次」論の現状と課題

正岡義朗 136

II 文禄期「太閤検地」に関する一考察

斉藤 司 152

―文禄三年佐竹氏領検地を中心に―

III 島津氏の財政構造と豊臣政権

桐山浩一 172

第3部 領主・代官としての石田三成

I 石田三成佐和山入城の時期について

伊藤真昭 202

II 佐和山城の絵図

谷口 徹 241

III 豊臣政権下の博多と町衆

本多博之 267

第4部 合戦における石田三成

I 忍城水攻め

鈴木紀三雄 304

II 豊臣政権の情報伝達について

国重顕子 322

—文禄二年初頭の前線後退をめぐって—

III 関ヶ原合戦の再検討

布谷陽子 349

—慶長五年七月十七日前後—

付録 石田三成発給文書目録稿

谷 徹也編 371

初出一覧／執筆者一覧

石田三成

総論 石田三成論

谷 徹也

はじめに

石田三成の生涯を描いた研究書としては、渡辺世祐『稿本石田三成』（一九〇七年）と、人物叢書の一つとして出された今井林太郎『石田三成』（吉川弘文館、一九六一年）が先駆的な業績としてまず挙げられる。この二書は関係史料を収集し、悪者や佞臣といった印象の強かった三成の汚名返上を図ったものであり、研究史において極めて重要な意味合いを持つ。一方で、特に近年においては、知将や義臣といった三成イメージが浮上しているのも事実である。

こうした奸臣と義臣という二つの極端な印象を排し、一次史料に立脚して客観的な評価を与えようとした研究動向を代表するものとして、太田浩司『近江が生んだ知将 石田三成』（サンライズ出版、二〇〇九年）と中野等『石田三成伝』（吉川弘文館、二〇一七年）が挙げられる。この両書を中心に、三成像の再検討がなされているのが現状といえよう。両書を得た現在において、本稿は屋上屋を架す感もぬぐえないが、三成をめぐる見解を整理することで今後の便宜を図るとともに、三成に関して検討すべき点はまだ多く残されているという例を示すことを目的とした。

以下、本稿では三成研究の到達点と課題について総括を行い、これまで紹介されていない史料や事例について可能

な限りで言及していく。なお、右の四書については、何度も引用を行うこともあって、記述箇所を明確にするために「渡辺1頁」のような形で、対応する研究のうちで最も早くにその事柄に言及した部分を示したい。

一、石田三成の人物像

（1）三成の身辺

生涯 石田三成は、永禄三年（一五六〇）に近江国坂田郡石田村（現在の滋賀県長浜市石田町）に生まれた。石田家は当地に所在した青蓮院門跡領山室保の代官を務めた土豪で、戦国期には京極氏や浅井氏の影響下にあったと思われる。「渡辺2頁・太田27頁」。三成の履歴をまとめたものとして、本論文集には第1部I森岡榮一・太田浩司「石田三成の生涯―その出自と業績―」とII太田浩司「戦国を疾走した秀吉奉行」を収載した。これらは一九九九年と翌年に開催された長浜城歴史博物館の展覧会図録に収録された解説文である。三成の没後四〇〇年にあたって、その足跡を史料から辿ることを目的として企画された両展覧会は、現在に至る三成像の再検討という流れの起点に位置する。

また、さらに詳細に三成の生涯を知るためには、前掲の中野等『石田三成伝』を避けて通るわけにはいかない。同書は、二〇一一年に刊行された藤井讓治編『織豊期主要人物居所集成』（思文閣出版）所収の「石田三成の居所と行動」が基盤となっている。三成の動静が明らかにされたことで、受発給文書や関係史料の年次比定の難度は飛躍的に改善され、三成研究は新たな段階に入ったといえよう。また、『石田三成伝』は引用史料に現代語訳を添え、未翻刻史料も積極的に紹介しているため、これから三成について調べようとする人々への配慮が見られるだけでなく、随所

に先行研究への批判や新説も盛り込んでおり、現状の三成研究の到達点といえる大著である。

名前と花押 三成の名前は、江戸時代から「ミツナリ」と「カズシゲ」の二説が存在した。後者は『甲子夜話』などで紹介されている話であるが、その根拠となる自筆仮名消息は存在が確認できず、若い時の署名が「三也」であることから、「成」は「也」と共通する「ナリ」と読むのが妥当だと考えられている。「渡辺11頁」。また、「三」の方はというと、三成から偏諱をもらったと思われる相馬三胤が関ヶ原の戦いの後に「蜜胤」と改名していることが注目され、こちらにも「ミツ」と読む可能性が高い。よって、本稿でも従来通り「ミツナリ」を名前の読みと考える。⁽¹⁾

では、実名を「三也」から「三成」に改名したのはいつだったのか。今井氏は天正十三年（二五八五）七月に通称を「佐吉（左吉）」から「治部少輔」に改めた時に実名も変えたと推測する「今井7頁」が、天正十三年以前の段階で「三成」の署名が確認できるとする太田氏の指摘「太田46頁」もある。これはどのように解釈すべきであろうか。

巻末の石田三成発給文書目録稿を参照するとわかるように、天正十年八月段階で「三成」と記すものもあれば、天正十三年九月段階でも「三也」との署名が確認できる。よって、ある時点で「三也」から「三成」に切り替えたわけではなく、当初は音の通じる「也」と「成」を併用しており、天正十三年下旬以降にそれらを「三成」に統一したと考えるのが現状では妥当と思われる。⁽²⁾ なお、本稿では混乱を避けるために、三成と表記することとする。

最初期の三成発給文書に見られる花押型は、中央部横線が跳ねない点において、後の三成の花押型とは区別することができる。⁽³⁾ よって、前者をI i型とし、後者をI ii型とする。I i型の終見は（天正十一年）六月二十八日付の書状であり、I ii型の初見は（天正十三年）三月十一日付の書状である。この後、中央左下部の特記が下方向に貫通するという細部変化が生じるためこれをI ii a型とするが、I ii型との境界の時期（天正十七年三月～十一月）には微妙

な例が数点見られ、I ii a型が支配的になった後（同年十一月～）も僅かながらI ii型花押の存在が確認できるため、年代確定の基準としてはやや正確さを欠く。

屋敷 豊臣秀吉が政権の拠点とした城郭は、大坂城・聚楽第・伏見城の三つである。秀吉に近侍した三成もそれらの付近において屋敷を与えられていた。後に詳しく述べるが、茶会記などには京都や大坂の三成屋敷での茶会の様子が記されている。また、天正十四年五月十五日には大坂屋敷に上杉景勝を歓待し、慶長三年（二五九八）五月晦日にも九州に下向する途中に大坂屋敷で猪苗代兼如（是齋重鑑）らをもてなしている。⁽⁴⁾

右の大坂屋敷について、櫻井成廣氏は、本屋敷を大坂城大手口の北西、下屋敷を備前島の宇喜多秀家邸の横と推測している。⁽⁵⁾ しかし、その典拠は後世の聞書類であり、当時の史料から裏付ける必要がある。一次史料では、①『西笑和尚文案』八六号（慶長三年七月二十四日付）に「大坂にて残り候屋形ハ備前中納言殿（宇喜多秀家）・増右（増田長盛）・石治（石田三成）まてにて候由候」とあり、②『鹿苑日録』慶長四年九月七日条に「自其徳僧（玄以）者又被赴于内府公（徳川家康）、其時者早内府、石田治部少輔殿之殿ニ出御也」、③同月十三日条に「石田木工（正澄）殿へ行、内府公十二日ヨリ出御風説之故也、其子細者、石田治部殿ハ城外也、木工殿者城内成故也」とあるのが三成屋敷を示す手がかりとなる。

大澤研一氏は②において家康の移動は大坂城の二ノ丸に留まっているとみて、①・②に見える三成屋敷は二ノ丸内にあつたと推測している。⁽⁶⁾ しかし、②と同じ建物を指すと思われる③の記述からは、屋敷が郭外にあつたことが判明する。このとき、家康は備前島を御座所にしていたとされており、②・③は備前島の屋敷を指す可能性がある。また、①の並びからは、宇喜多邸・増田邸の付近に三成屋敷のあつたことが窺え、こちらも備前島と理解する方が妥当に思

われる。

伏見の三成屋敷については、木幡山伏見城（伏見山城）本丸の西にあった「治部少丸」という曲輪が著名である。また、下屋敷も郭外の南部に存在したと推測されている。⁽⁸⁾ なお、慶長三年五月の大雨によって、「石治南の石かけ（石垣）」が崩れており、矢部健太郎氏はこうした脆弱性から、伏見城は権威の象徴であり、戦闘を想定した城ではなかったと評価している。⁽⁹⁾ ただし、その構造からは、軍事的要素も多分にうかがいうる。「治部少丸」は元和五年（一六一九）の伏見城破却時にも同様に呼ばれており、石垣の一部は藤堂高虎に下げ渡された。⁽¹⁰⁾ 持病と好物 当時の衛生環境はかなり悪かったため、人々は持病や感染症などに悩まされていた。三成も真田信幸宛ての書状の中で「拙者煩能候間、以面可申入候」「拙子煩之事、はやすき候、よく御座候」「煩ゆへ二申不承候、はや煩もよく候」と述べており、度々体調不良に陥っていたようである。では、その持病は何だったのだろうか。

〔史料1〕「富岡文書」東京大学史料編纂所影写本

（端裏書）「山城州とのへ石」^(三成)

尚々彼目安返進候、以上

御状拜見申候、仍百性目安持被越候、何も在々百姓之訴聞届、我等へ可申聞候旨所々へ奉行相定候間、彼奉行二可申之旨被仰付候、腹中氣二候てふせりる候間不具候、恐々謹言、

十七日

この史料は筑前・筑後の蔵入地の村落統治に関するものと思われ、慶長三年七月から同四年正月までの間に発給されたと考えられる。書状で問い合わせをしてきた山中長俊に対し、「腹中氣」のため臥せっており、意を尽くせない

と述べている。また、上杉景勝が三成に宛てた書状の中でも、「御腹中御煩由候、無申迄候へ共、御養生可被申候」とあり、三成の持病は腹痛だったことが確かめられる。なお、三成は奥州下向中、横浜一庵（良慶）が柿百個を届けしてくれたことに対して「拙者好物御存知候」と述べて感謝しているほか、美濃の長谷川勝五郎からも音信で枝柿を送られている⁽¹³⁾ため、柿が好物であったことは当時もよく知られていたようである。これらの事実からは、関ヶ原の戦い後に捕縛された際の腹痛と柿に関する逸話も想起されよう。

墓所・遺骨・肖像画 三成の没後、交友の深かった大徳寺の春屋宗園は三玄院に石田一族の墓を建て、三成に「江東院正岫因公大禅定門」の法名を付け、三回忌も弔った〔渡辺297・298頁〕。三玄院は天正十四年に三成や浅野長継（幸長）・森忠政らが檀越となつて創建されたといひ、近代に入つて龍翔院などと合併し、現在の姿となった〔渡辺299頁〕。

明治四十年（一九〇七）五月十九日、時事新報社の主催で朝吹英二氏・渡辺世祐氏らが参加し、三玄院の三成墓所の発掘が行われた。⁽¹⁵⁾ 当時は同院の墓地は荒れ果てており、三成の墓と伝えられる石塔の下が試掘された。午前九時半に始まった調査において、渡辺氏は自ら穴に入って発掘を手伝ったが正午になつても見つからず、諦めかけたところ、直径六〇センチほどの瓶が発見された。その中に納められた三成の遺骨は、足立文太郎氏によって鑑定と復元がなされて頭蓋骨の石膏模型が作成され、遺骨本体は十月二十日に改葬された〔渡辺298頁挿図〕。

足立氏の鑑定結果によると、三成は女性に近い細面な顔立ちで、才槌頭と反歯が特徴だったと見られている。こうした特徴は、江戸時代に描かれた現存唯一の肖像画（杉山家蔵）とも共通していることが指摘されている。⁽¹⁶⁾ このとき作成された石膏模型は近年に再発見されたという。また、昭和五十一年には足立氏の調査結果を基に、長安周一氏が三成の復顔像を作成し、その像を参考にして前田幹雄氏によって肖像画が描かれた。

なお、三成は高野山にも生前に建立した逆修の石塔を建立しており「渡辺308頁」、こちらも現存している。

(2) 三成の家族

父・正継 三成の父・正継は初め「十左衛門尉」と名乗っており、後に「隠岐守」と改めたことが知られている「太田36頁」。現状わかる範囲の「隠岐守」の初見は天正十六年四月の聚楽第行幸への参列の記事と見られ、同年閏五月二十六日に堺に到着した島津義弘らを接待した際にも「隠岐守」と記されている。¹⁷「隠岐守」を称する最初期の発給文書と思われる同年十二月二十日付の定書からは、三成に代わって堺の代官支配に携わっている様子がうかがえるが、その花押型は「十左衛門尉」時代のものとは異なっている。そして、それ以後の花押の概形は変わっていない。

正継は醒ヶ井の松尾寺から六十巻の書籍を借り受け、三成にも見せようとしたが機会がなく返却していることから、教養人であったことが指摘されており「渡辺327頁」、その発給文書では口語的な文言や藍印が使用されており、個人的な人物と見られている「太田38頁」。

妙心寺の寿聖院は三成が正継のために建立し、慶長四年に落成した。正継の肖像画と文禄三年（二五九四）九月付の伯蒲慧稜の賛が現存しており「渡辺304頁挿図」、中野氏は落成以前から妙心寺内で関連する仏事が行われていたと推測している「中野242頁」。同院にも三成一族の墓があり、佐和山落城の九月十七日には法会が行われている「渡辺305頁」ほか、三成が寄進した狩野永徳の屏風も現存している「今井229頁」。

母・瑞岳院 三成の母については、意外にも多くの関係資料が残されている。法華寺跡（現在の滋賀県木之本町古橋）には「石田隠岐守内方」の墓があり、墓碑によると文禄三年九月三日に死去したと見られる。¹⁹これは、三成の兄・正

澄が母の死を悼み、猪苗代兼如が和歌、大村由己が追悼文、藤原惺窩が漢詩を詠んだ「文禄甲午之秋」と合致する。²⁰また、春屋宗園の記した『大宝円鑑国師一黙稿』の肖像讚によれば、三成と正澄がそれぞれ瑞岳院の肖像画を作成し、その讚を春園に求めているが、後者には「文禄第三甲午小春上澣」とあり、同年十月上旬に讚文が書かれたことがわかる。さらに、同書の香語によれば、同十月二十二日に三玄院で葬儀が営まれている。なお、正継像の画讚も同年九月の日付を持っており、中野氏は寿聖院建立が瑞岳院の死と関連したものと見ている「中野242頁」。

三成は佐和山に母の菩提寺の瑞岳寺を建立し、慶長四年に宗園・董甫紹仲・江月宗玩を招いて、九月二十二日に七回忌を行った。宗園と宗玩は翌年に帰京したが、紹仲は瑞岳寺二世として佐和山に留まった「渡辺301頁」。当時失脚中であった三成はそれに先立つ九月一日、刀を下げて扇を手を持つ秀吉肖像画を作り、宗園に讚を書いてもらっている「渡辺296頁」。他にも宗園は三成に面壁達磨の讚語と布袋図の画讚、石田正澄に陶淵明の図の画讚、三成家臣の德音新介に半身達磨の讚語を求められている。²¹なお、宗安寺現蔵の地藏菩薩立像（石田地蔵）は三成の念持仏であったと伝わり、瑞岳寺から称名院を経て同寺へ移ったものとされる。²²

また、三成は高野山にも母の菩提を弔うために経蔵を造営した。文禄五年正月に火災にあうものの、すぐに再建し、慶長四年三月二十一日付の棟札には「為悲母菩提也」と書かれている。経蔵の中には朝鮮から持ち帰った高麗版大蔵経を収め、奥書にも「三成為亡妣所附也」との記載があるという「渡辺307・308頁」。

兄・正澄 三成の兄の正澄は、最初「弥三」といい、文禄二年九月三日に従五位下木工頭に叙任された。²³しかし、天正十六年四月には「石田木工頭」と記されており、現状での「弥三」の終見は天正十五年六月二十五日付の秀吉朱印状であることから、その間に私的に「木工頭」を名乗り、文禄二年に正式に任官されたものと考えられる。なお、最